

日本医史学雑誌 第四十三卷第一号 目次

原著

藤浪鑑の医史学的検証 附 藤浪肉腫ウイルス・遺伝子の研究	杉立 義一	三
古記録にみえる室町時代の患者と医療 (一) — 『看聞御記』 嘉吉元年入江殿闘病記録から	水谷惟紗久	三七
ジロラモ・フラカストロの伝染理論	伊藤 和行	五九
幕末の弘前藩における痘瘡流行と牛痘種痘普及の実態 — 豪商金木屋又三郎日記による研究 —	松本 明知	六九
研究ノート	後藤 志朗	八五
『勅撰真本大同類聚方』について	泉 彪之助	一〇一

資料

衛生学者坪井次郎業績	中川 米造	一三三
------------	-------	-----

追悼

丸山博先生を偲ぶ	長瀧 重信	一六六
----------	-------	-----

記事

シールボルト生誕二〇〇年記念国際医学シンポジウム	長門谷洋治	一七八
--------------------------	-------	-----

第36回医学史研究会・日本医史学会関西支部一九九六年秋季合同総会	大瀧 紀雄	一九九
----------------------------------	-------	-----

例会抄録	中西 淳朗	二二三
------	-------	-----

アメリカと日本におけるヘボン	大瀧 紀雄	一九九
----------------	-------	-----

江馬式蒸気風呂と薬草	中西 淳朗	二二三
------------	-------	-----

懸田克躬先生のこと…………… 岡田 靖雄 …… 二四

紹介……………

アーノ・カーレン著、長野敬・赤松真紀訳『病原微生物の氾濫』…………… 深瀬 泰旦 …… 二六

C・P・ツュンベリー著・高橋文訳『江戸参府随行記』…………… ヴォルフガング・ミヒェル …… 二九

シーボルト生誕二百周年記念号『鳴滝紀要第六号』…………… 石田 純郎 …… 三二

唐沢信安著『済生学舎と長谷川泰一野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学校』…………… 中西 淳朗 …… 三三

山県郡医師会編『広島県山県郡医師会史上・下』…………… 江川 義雄 …… 三三

〈本号の表紙絵〉

十七世紀初頭の疫病書の扉絵

バイエルン宮廷で選帝侯マクシミリアン一世の侍医になった Raymund Minderer (1570頃-1621) は、酢酸アンモニア溶液を創製して医学の領域にとり入れ、解熱剤として使用した。この溶液はかれの名をとって、1776年に John Fothergill(1712-1780)によって“spitritus mindereri”と命名されている。

このころ Hadrian a Mynsicht が吐酒石を、Wilhelm Homberg(1651-1714)が硼酸を治療に用いているので、Minderer の治療もこの一環と考えることができる。

おおくの著作を出版しているが、そのなかの一書が、この *De pestilentia liber unus veterum et Neotericorum observatione constans* である。本書は本文386ページの八つ折り判で1608年に出版された。古人や同時代人が観察したペストを、医学的、呪術的、神話的な観点から記述しているのが特徴であり、ペストにたいする処方としてクモやミミズの油を使用している。

扉の下方部分には、疫病でたおれた人びとの累々たる死骸がえがかれ、酸鼻をきわめた状況を物語っている。
(深瀬 泰旦)